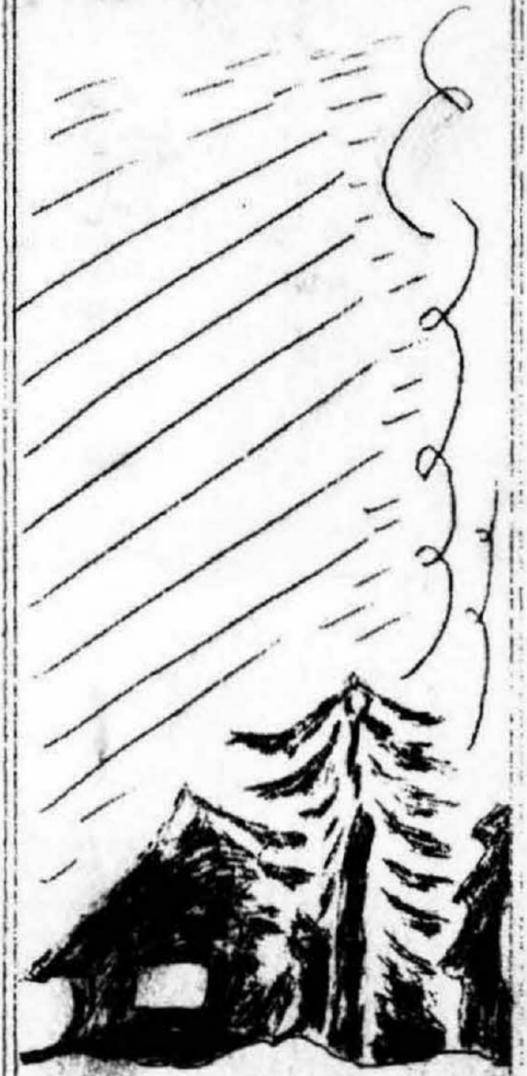


報會



号十第年二第

昭和七年二月十日発行 通巻十五号

久しぶりに大阪へ来て

六月の十日と云へば最早六ヶ月前だ。自分が懐しい東京へ帰つてから半年もはや過ぎたとは思はれぬ。今度例の調査の用件でこの地へ来て見ると支店の運中は勿論の事トシやん、クロチやん、猶高木といふお訓じみが沢山居て仕事の上の能率がさっぱり上らないには閉口してしまつた。仕方がないので気分転換の意味で予定を少し変して去る廿一日大阪の天保山を出て摂陽商船の船で淡路島にやつて来た。船は淡州丸と云ふ余り大きくもない。然し海上至極平穩で母に弱いので心配して居た事もなく、兵庫、假屋、志築といふ様な東浦の小港により約四時間半で淡路第一の都洲本を卓頭に着いた。海は全く静かだった。琵琶湖の上を走つてゐる様な気分だった。遠景はモヤで見えなかつたが淡路の海岸は実に奇麗である。洲本では淡路第一の旅館三熊館といふのに泊る。用件を早

く切り上げて後にある城山に登つて見た。此の辺は要塞地帯だから寫真をとる事が出来ない。撮さずには居られぬ様な景色であつた。鉄筋で出来た本丸がある。東ノ丸といふのもある。昔の城壁そのまゝの石垣がある。そこのにある戦国時代の事を思ひ出して来る。徳川の時代にあつて此処へ封ぜられた殿様が由良やこゝに大規模の築城工事を施したので直ぐおとがめを蒙り播州の方へ目換へにあつてしまつたとの事、全く此処は要がいのである。

洲本に上陸して驚く事は町へ這入るのに女郎屋の間を通らなければならぬ事だ。人力車に乗つて居のだヒツバラれずには済んだもの、旦那はん後でお出でふはれやしなんて云つて居た。

× × ×

今日は昨日海岸から見た所を自働車で通る。返子や葉山の海岸とは雲泥の相違で岸辺に打寄せる波の色が水無輪かきゆう皮の様な感じだった。右手遙かに和歌山の辺りが霞だ。一日中電燈の下で帳面を見てゐる父や母を一度でもいゝからこんふ所へ連れ来て来たいものだと思つた。志築で二件済ませ、(此処で悪い己性症を発見した、まづ御手柄の部と云へやう)生徳へ来た。三原館といふ宿屋に泊る。ひまなもんだから女中を二人

連れておしるふを呑み、帰りにおぼろ月夜の海岸を歩いた。下度兵庫から来た淡路通の船が出る所、波の上電燈を淡山つけて静かに走って行く所は、気持のいいながめだった。洲本や、志築の町の灯が海辺沿ひにキラキラしてゐる。宿へ来たのは八時半頃だった。明日は又嫌な仕事を乍ら先の町へ行かねばならぬ。

淡路島生穂三原屋にて(六、二、二夜) 熊

雪 無 し ス キ ー

船に氷、スケート氷、スキーと雪。之等の相関関係たるや唇齒も奪ならず、水がなくても走る舟なんといふものは、進水式の船台上の光景位のものである。折が、なんと、自他共に雪国を以て許す妙高、赤倉に昭和七年の正月早々積雪十五センチ、何と情ないじやありませんか。それは出発前からの大問題にはなつて居た。

「どうだい。雪はあるだらうか？」 「あるよ。相手は雪国だ。ある折にはあるが、無い折には無いんだよ。」 「有る折にはあるよ。成程、あるね。」

とうとう有る事にして元日の晩、信越線に乗り込んだ。一夜明くれば白妙のと云ひたいが、柏原に来ても土儀に撒かれた塩位しかない。妙高の鹽場は、藪だらけ、田口附近は稲の切株がニヨキ／＼と出てゐる。取から宿舎まで、此宿舎たるや実に妙

高スキークラブ會長星野錫太郎邸で其処に出入する人々の消息は町中のセンチションを引起すといふ大變な家なんである。しるまるで泥中行進だった。

「池の平はどうです？」

「木株だらけであぶなくつて／＼」

「鹽場は？」

「あることはありますがね」

スキーは名に負ふ長洞製日本アツシユ、杖は京都産、乗手は、……折で雪がない、陽はうら

い。近々に降るとも見えぬ。さて、弱った。が馬車平とやらといふのが稍滑れるといふので担いで

行つた。全く、途中履く折がない。大變な人だ。順番を待つてゐる。銭湯みたいだ。斜面が長くて

強い。そして下が緩だ。止らないと緩制動になる。八幡大菩薩に武運長久を祈り断然滑走を開始すれ

ばアナヤと云ふ間もあらせず、物凄く緩に突込み、松の稚木をへし折つて漸く止つた。何のこれしき

に恐れるかと、二度起つて……此起つのが一

苦勞だ。今度は文字通りの七転八倒、突にもスキー

は人生の縮図であつた。第三回目のモーション、

どうやら満足に下まで来たやレ嬉しやと思ふも束の間、木株に右足を引掛けズグリン。此の如き難

行苦行を繰り返すこと無慮数時間、天も其苦闘を嘉してか、夕方にはどうやらほろ酔い嫌位の足許となつたが、雪は少し株は多し、全身三十六ヶ所の

打撲傷、スキーで転んでも真綿にくるまる様だといふ先輩の言教を欺き、転んだ時はキナ臭い程の痛撃痛打、未だに残る腰の黒アザ、といふ様な始末で、其日の夕刻降り出した時は、明日から痛くないと思ふ方が滑れると思ふよりよっぽど先だつた。が其雪も僅十センチ足らずに降り止み、後には憎やきらのく星空。三日の夜はほのぼのと明け初めて今日も透きとほる様な快晴、池の平まで行ったが矢張り木根岩角といった土合で喘まされること一通でない。かくて積雪量は滞在日数の減少に正比例して減つてゆく。勘定高い関西スキーヤーは腕々帰り始めた。四日、午前七時メた！、感に降つてゐるが、薬物の南風が強い。今日は赤倉遠征一僕にとつてはたしかに遠征だ！小供や先達の地元スキヤー四人兄弟を加へて總勢十三名といふ大部隊。あの緩い登りはどうやら無事だったが、久通宮別邸前のスロープでは成度かの顔面制動に度胸だけはついたが、夕風寒き帰路はすっかり凍てつき、剥え所々の石塊路には全く悲鳴をあげてしまった。

あ、かくて、雪国なれど、あるべき所にも雪は無く、土地の古老は四十年の寡雪と驚き、スキー宿は臨時産の女中が客より多く、今年スキーに志たる不運者はスキーの書物にも記載なき木株制動を学んだのであつた。

雪よ、心あらば降れ、野も山も、家も埋めつくせ。せめて木株だけはお前の下にあれ。  
(浩一 一郎)

「殺してくれ」

昨年の暮謙ちやんの兄さんからとても素晴らしいつスキーを送つて貰つてすつかり宇頂天になつて朝出勤前に先ず一寸「スキー」の先を曲けて見てそれから木目を一通り検査したら先ず靴をぬぐ前に朝と同じ様な事をして茲数週間は全く「スキー」狂になつてしまった。

それがあつさりスキーに行ければ向題がないのだが行けないからいけない。

それで何んとかよい機会をとねらつて居た矢先に熊さんがスキーの先生になつて岩原に行くといふので若干会社の方は土曜日も休んでそれから中川君を誘つた処「よし」行かう!!、そして「ん」と殺して貰はう、なんて物凄いな運事だが、とても僕には先輩を殺すなんて度胸はない。

切て金曜日になると殺されに行く人が転宅で都合が悪いと断つて来た。

僕は此の時こんな返事をした様に思つて居る「それは残念だね、実によい」「チヤンス」だが何んとか都合がつかないか知らしと云つて電話を切つた。

ふと考へて思はず笑つてしまつた。「チヤンス」と言つたが是れは中川君にとつて見ると「殺され」るチヤンスと云つた「僕」とつては先輩を殺す「チヤンス」と云つた工合になる。いや、全然殺す意志も半殺にする意思もないのであるがたま／＼口をついて出た「チヤンス」と云ふ言葉がそんな風にとれてしまつたのではないかなと考へておかしかった。果せるかな此の恐ろしい「チヤンス」を中川君は捕へなかつた。僕もほつとした。妙高で全身打撲傷なら岩の原では全身骨折と云い度いのが駄目である。殺すにも殺し様のない処である。例へば野の「シヤンツ」尾根の様に上からは下が見えない様な処であるとか、或は天から滑り下りる感のする鉄索の尾根と云つた様な処があればまた殺し様もあるが岩の原ではとても駄目である。

到底スキーでは殺せない処である。

岩の原で殺そうと思へば矢張り飛道具が或は日本刀でもなければ駄目である。

それでも先生たる熊さんが教授振りはとても猛烈である。

弟子「先生、先方に木の株があつた場合どうして又れを避けた方が宜ろしいのですか」

先生「いや避ける必要はない。ぶつかつてしまへてな調子である。」

そして十人程の弟子に直滑降を丹念に教元て居る、

中川君も若し本當に殺してほしければ熊さんに師事して一度でも二度でも木の様にぶつかつて死んで見る必要がある。そして此の世に戻つて来なかつたらペンちゃんにお経を誦んで後世を祈つて貰はう。若し蕪生して未たら!!、あゝ恐ろしい恐ろしい、そんな事は考へません。今度殺されるのは僕の番だから、あゝ恐ろしい

(狸)

野澤合宿記

針葉樹會報にデビユ一するにいづれも會員諸兄のなつかしき思出を載する野沢の今年の様子を記してみますそのうちでも一番滞在日数の多い僕が書くのだから當らないことも多くあると思ふ。暮のうちは学校の方が三十人位もいられたが皆引きあげ勝田氏文残り、手塚、時田、平井の三氏が元旦朝野沢に来それからは小乗さんと僕と他に学校の人もみえて急ににぎやかになる。今年は何年にも無い程雪が少なくて上境には雪が全くなく野沢には乗合が通つている。例の渡船は今はなくなつて粗末な橋が出来ているので便利になつた。僕は自動車はとも乗れさうもないのでスキーと荷物をかついで野沢につく殆んど雪がない。酒屋につけ

ばいってもながらの玄関大混雑、此の宿しもう始  
めて来てから六年目位である、三階の別の床の間  
の部屋につく皆未だ出掛けないで炬燵にあたって  
いた、手塚、平井、時田君としばらく話をして  
してスキーを持って出掛ける。

ゲレンデは実にカチ／＼にふみ固められてある  
ので散遠してあの田のあぜを通って峠の方にゆく、  
驚いたのは昔は大門オンリーであつた汁粉屋そこ  
はあの前毛無で暮の廿九日頃往年の猛看中島嘉一  
郎君が日本男子の本懐をぶけんで當時一度か二度  
目のスキーであつた僕等をしてあの日の非常な寒  
さの上に加へて一鼓と心胆を寒からしめられて帰  
りは雪だらけになつてとびこんだ店だつたが今は  
それ類似の同業者がズラリとならんている、呼び  
古るされたパラダイスはユートピアに鉄索尾根は  
シムナイダー、スロープと変つていた、鉄索を独  
りでのぼつてゆき野沢峠から来た路と合する辺に  
は樺の木小屋と云ふのがたてられて御茶をのんだ  
り焚火に手をあた、めるには都合が良いこ、は可  
成良いスロープがある尚それから上の平にゆくと  
多少は雪が良くなつてこ、にも今年は多くの女の  
スモリヤーが多い帰りは峠をまわつて帰る、夜は  
例の炬燵を囲んで雑談、懐旧談にふける、只惜し  
いことに、談は名士多数集つたにも拘らず出な  
つた、小栗先輩が支那ジャヴァの豊富な話、果て

は本職のセンコメーター（御存じなき方は小栗製  
作所に御領ちします）に及でカン談、時のたつ  
のし知らず実に楽しい時を送つた、宇佐美君が訪  
ねて来た、又ある時は半日位サボつて白銀の雪に  
反射して明るい鷹の湯にのんびりひたつたりして  
全くのんびりしてしまふからして日こそ短か、つ  
たが皆で面白い日を野沢に送つて終了した。

（久保田）

「北海道だより」

其後御無沙汰致しました、今年は何処も、雪が  
悪い様ですが、何処へ出掛けましたか、  
一月末御来道の赴承りましたが、北海道は三四  
十年以来、店紀元初まりて以来（何となれば、三  
四十年前以前の事は不明なればなり）初めての暖気  
にて平地の雪は腐つて了ひました。

尤も千米以上は良さそうですが、それ迄のグツ  
シムが難行を予想されます、

若し差支なくば、二月中旬以後に延期しては如  
何、三月には天候も定まり、山歩きには最適と思  
はれます、

小生十勝或はムイネシクへ是非御件致度、今よ  
り準備致して居ります。

御予定御一報願度

奥野 綱重

野沢

敏坊が、飯山中学の五年生となり、此三月の卒業には、明治、早稲田等の各スキー部から、引手数多と云ふ、年頃になつたのだから、小学校の五年頃の敏坊しか知らない、古い野沢合宿時代の人達には、今の野沢温泉は随分変つて見える。もとよりスキーの上手だつた敏坊の事だもの、昨年の明治神宮のスキー大会に於て、少年組ジマンプの、二等を取つたからとて、矢つ張りなうなづく火けで、既に考へられない事ではない、上境内改札口から、馴染み深い、荷物担ぎの人夫達の、赤い帽子が覗いて居る。「酒屋の敏坊が五十三米出して、額をすりむきましたよ」と其の中でも、酒屋へ良く来る赤い帽子が、嬉しそうに叫んだ、だが駄の表は、黒い土の上に雨が、雨が降つて居る。靴を泥にまみれて千曲川舟橋を渡つて温泉へ着いた時、毛無の山派は黒ずんで居た、神社からスキー場の、坂路が辛かつた、向々さ、んじやねえかね、大茂んの、汁粉を湯一杯売つて、袋は空っぽだつたと云ふ馬鹿息子が後から上つて来た。

「雪がねえで困るでさあ」  
 「親父さんはどうしたかね」  
 「父のちやんかね、あの暮場へ眠つて居るだあ」  
 此の息子が言葉が、妙に神秘的に聞える、昨春

野沢へ来た時、是非遊びに来てくれと昔なつかしきうに話しかけた半身不随の、大茂の親父も思出の中に消えてしまつた

消息

中川孫一 東京市外中野町桃園一九転居  
 松木謙三 横浜市中区本牧町下里三一五三転居、  
 安田銀行横浜支店勤務

河相 薫 二月一日より廣島第五師団に入營す。

(主計)

宇佐美敏夫、久保田礼治、手塚晴破、正月野沢温

泉スキー行 (本文参照)

中川孫一、正月妙高スキー行 (本文参照)

近藤恒雄、吉沢一郎、一月中旬越後岩原スキー行、

(本文参照)

手塚晴雄 十二月初越後湯沢温泉スキー行。

編輯幹事、スキーに許り出掛け帰れば又業務多  
 勢多端、會報の発行を一月末におくらし、然かも  
 編輯たるや赤面、会員諸兄の消息は幹事としては  
 詳細に渡つて報道し、以て地方会員の便益に、供  
 せんと心懸け居る次第ですから何分の御援助と御  
 鞭撻を御願ひ致します。